広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

肥前びーどろの素晴らしさを全国へ

副島正稚　佐賀／肥前びーどろ職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイン関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなる大きなチャンスを手にした。

1月24日、プレゼンテーションにて

プレゼンテーションをする副島さん

また当日は、2019年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARTA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(AN REALAGE／代表取締役社長・デザイナー)、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター／プロダクトデザイナー)が登壇し、想いを語った。2019年秋頃には、完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。佐賀県選出の匠、副島正稚(まさのり)さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

スーパーバイザー
小山　薫堂氏

1964年6月23日熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科に通う。「進め！電波少年」や「料理の鉄人」など、数多くのヒット番組の企画・構成に携わる。執筆活動の他、京都造形芸術大学副学長、地域・企業のアドバイザー、下鴨茶寮主人などを務める。「くまモン」の生みの親でもある。

吹きガラスの魅力 感じられる器を

副島さんは幕末佐賀藩の"理化学研究所"だった精煉方(せいれんがた)にルーツを持つ副島硝子工業(佐賀市)で「肥前びーどろ」を製作するガラス職人。今回のプロジェクトでは、型を一切用いない肥前びーどろの「宙吹(ちゅうふ)き技法」を駆使しハイボールグラスを製作した。

「プロジェクトへの参加が決まって自分が目指したのは、宙吹きガラスならではの柔らかいラインと自然な風合いが感じられる器。持ちやすさと飲みやすさにも徹底的にこだわった。ただ、型を使わずに成形するのは非常に難しく、量産化への不安もよぎった。そんな課題に直面しながら形を整えていった工程は楽しくも辛い挑戦だった」。副島さんの言葉どおり、今までになかったハイボールグラスを求めて試作した数は200を超えた。

商談をする副島さん

プロダクト(製品)の名前は「天開タンブラー黄昏(こうこん)」。細くどっしりとしたボディーから飲み口にかけて花弁のように開く独特のフォルムで、グラス下部には肥前びーどろ伝統の瑠璃(るり)色をあしらった。「ハイボールの琥珀(こはく)色と肥前びーどろの瑠璃色を合わせ、ハイボールを注いだ時に夕暮れを連想させるアイデア。瑠璃色をどこに、どれぐらい乗せるか。それだけでかなり試行錯誤した」。その努力は報われる。プレゼンテーションの商談ブースでは「色のコントラストが秀逸。ハイボールを飲むのが楽しくなりそう」と高い評価を得た。

佐賀を代表する伝統工芸を次代に受け継ぐため、愚直に仕事と向き合ってきた副島さん。約半年にわたるプロジェクトを振り返り、「これまでの自分の作品にはなかった、シンプルで遊び心のある仕事ができた気がする」と控えめに胸を張った。

完成プロダクト「天開タンブラー黄昏」

伝統継承し新たな展開模索

涼やかでやわらかい形状のコップ、おしゃれなグラス、そして、かつての佐賀の宴席に欠かせなかった「肥前かんびん」。副島硝子工業だけが受け継いでいる肥前びーどろは、ずっと佐賀の暮らしを彩ってきた。家業をもり立てようと脱サラして職人の世界に飛び込んだ副島さん。「肥前びーどろの素晴らしさを全国に発信したかった」とプロジェクトに参加した動機を打ち明ける。

「小さい頃に工房をのぞいていたとはいえ、最初は素人同然。宙吹きは先輩の仕事をひたすら見て覚えた。この世界に飛び込んで13年目だが、今も修業の日々」。窯の中の真っ赤な溶岩のようなガラスの生地を「吹き竿(ざお)」に巻き取って息を吹き込み、空中で振ったり、板の上で回転させながら形を整える作業に黙々と取り組んでいる。

エリア・コンサルティングにて下川氏と

プロジェクトに参加した副島さんにとって幸運だったのは、下川氏が以前から肥前びーどろの魅力を熟知していたこと。当初は吹きガラスの味わいをストレートに伝えようと透明のグラスを試みたが、制作過程で下川氏から「肥前びーどろ伝統の瑠璃色を乗せよう。家で優雅にお酒を楽しみたいという需要は必ずある」とアドバイスを受けた。

「プロジェクトでは、下川さんをはじめさまざまな分野の作り手から刺激をもらった。この経験を大切にし、肥前びーどろの職人として伝統を継承しながら愛されるガラスづくりに努めたい」。副島さんは新たな仕事の可能性に意気込んでいる。

肥前かんびんを作る副島さん

副島 正稚
佐賀／肥前びーどろ職人

1982年、佐賀県生まれ。2001年、佐賀県立佐賀北高等学校芸術コース卒。2005年、倉敷芸術科学大学芸術学部工芸学科ガラスコース卒。在学中にガラス工芸を学ぶ。2006年、副島硝子工業株式会社へガラス職人として入社。佐賀の伝統工芸である「肥前びーどろ」を制作しながら幻の技法である「ジャッパン吹き」を修得中。佐賀市在住。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT